

今、彼女と恋愛が上手くいかないことに頭を抱えているんだろう？

…振られてしまったんだって？

ああ。

彼女を大切にしたいと思っているのはわかっている。

でも、ふと彼女を大切にできなくなったり、一時の迷いで他の女性に目がいっててしまつたりで自分がわからなくなることもあるんだろう？

何となく「自分のせいじゃないか？」とは思っているんだよね…

でも確実な原因がわからず、何で振られてしまったのかははっきりとはわからないまま…か。

…うん。

わかっているって。

本心では大切にしたいんだろう。

だからこそ”本心”と”実際の行い”とで大切にできなかつた現状があつて…

そんな自分に困惑しているんだよね？

ただでさえ彼女に振られて辛いのに、でも自分の中でも何をどうしたらしいのかよくわからなくなっているんだね。

…ああ。

泣きなよ。

泣きたい時は泣けばいい。

男だからとかは今はいいんじゃないかい？

僕の前だよ？

…はあ？

なんだよ。

こんな時に強がらなくていいよ。

せっかく僕が…。

まあ、今くらいは辛いことは忘れてもいいと思うよ…？

でも自分から逃げ続けていても、それが解決することはない。  
本当に本心からこの先の人生、誰かと一緒に幸せを築いていきたいと本気で思うなら、考える必要がある。

僕も考えるから、一緒に考えてみないかい？

何でいつも振られてしまうのか。  
何で自分のせいだと分かっているのに、その原因がわからないのか。  
何で彼女を大切にしたいと思っているのに、実際には大切にできないのかをさ。

え？

僕に何がわかるかって？

いや、実は僕も全く同じことを悩んでいた時があったんだ…。  
それを一人で一つ一つ克服して、今の彼女と一緒になれたんだよ。  
最高に性格が良くて可愛いんだよ？

あー。あの時は誰かさん連絡取れなくて一人で辛かったなあ？（笑）

…あ。

これは借りだよ？

後で奢ってね？

…そうだなあ。  
焼肉がいいな。

特上カルビと特上ロースをレア目に焼いてさ、それを白ごはんの上に乗せてさ…

…ん？  
ああ。  
ごめんごめん、そうだよね。

今はその話はいいか。

まあとにかく奢ってね。

さあ、もう目から汗は出なくなったんじゃないかい？  
もう君に辛さは必要ないと思うから。

え？

そんな遠回しなクサイ言い方やめろって？

なんだよ。

わざわざ気を遣つてやつたのにさあ。

じゃこれ使いなよ。

\*

- プロローグ -

綺麗な夕焼けで赤一色に染まつた空を眺めながら俺は目から出た、汗とも分からぬ水滴を腕で払いながら言った。

「いや、まじで辛い…。しんどい…。」

この美しい赤一色の景色がより一層、俺にダメージを与える。

何でこんなことに…。

何で俺が。何で…。何で。

階段に座ったまま、膝の上に乗せた手に力が入る。

時間を巻き戻す四次元アイテムがあれば、楽しかったあの頃に戻りたいと本気で思った。

自分が犯した過ちを考えるより、今のこのどうしようもなく痛くて辛い状況をどうにかしたいで”コイツ”を呼び出してみたものの、あまり意味がなかったかもしれない。

誰かに話して、この気持ちが楽になるなら、幾らでも喜んで話そうと思う。  
だけど呼んでからわかった。

この辛さは誰かに話して楽になる辛さじゃないんだ。  
今どんなことをしたとしても、むしろそれが全て逆効果になる。

「...。」

「まじで...。つ！」

もうどうしようもないこの気持ちを吐き出したいが吐き出せない。  
辛い。痛い...。

俺が自分のことでいっぱいいっぱいになっていた時にふと”そいつ”は口を開いた。

「そんなに辛い経験ができてよかったですじゃん？」

俺の気持ちを余所にケラケラと楽しそうに笑っている。

つ！  
こいつ...。

「...。  
いや今そんなポジティブに考えられないんだけど...。」

「そつかあ。  
じゃあ君はずっと辛いその状態のままでいるのかい？」

顔は笑顔のまま、しかし声は笑ってなく真剣なトーン。

...。  
コイツ。

何か言い方がイラッ...。

泣いている友人に向かって気遣いと言うものを知らないのか？

そんなわけないだろと！  
今の今で気持ちがぱって切り替えられたら、こんなに悩んだり辛くなったりしないだろ  
と...  
まあそう思いつつも、いつものことかと諦めて返事をする。

「...いや...。」

「じゃあそんないつまでもうだうだやっているんじゃなく、前に進めるように考えたり、自分の直すところを見つけたりした方がいいんじゃないかい？  
というか、これ何回目だっけ？」

背中の後ろの階段に手をつけながら、こちらに向けた目線は笑顔を通り過ぎてニヤニヤしている気がする。

…いやまあそうなんだよ。  
本当にその通りのことであるし、俺もできることなら今からでも前に進みたいんだよ。

それが正論なのは…  
わかってるんだって。

だから今のこのしんどい状況から立ち直るためにさあ…

みるみるうちに俺の顔が勝手にぐちゃぐちゃになっていく。  
いや堪えなくては…。  
自然と握り込んでいた右手。  
更に強い力で左手を握りしめる。

俺たちのいる公園の中を、老夫婦が笑顔で何かを話しながら仲睦まじそうに通り過ぎていく。  
散歩だろうか。

「…。  
さ…さん…？くらい…？」

「7回目。  
というか、3で、サバ読むのもだいぶ無理があるでしょ(笑)ていうか何で疑問系…？」

！？

相変わらずの笑顔。  
綺麗な顔立ちをした口元から発された、ちょっとしたおふざけのような、棘のあるような言葉。

やっとのことで捻り出した俺の答えを一掃されたことよりも、今のコイツの言い方に苛立ちを覚えた。

サバを読んだわけじゃないし。  
疑問系って今そこに突っ込むか！？いや、振られた回数だぞ？  
正直、あんまり覚えてないんだよ。

さっきまでの悲しみが嘘だったかのように、感情の上書きをされた怒りの気持ち。それを心の中でグッと堪えた。

というか、こいつそんなことまで覚えているのか。  
ツッコミもなんか秀逸でまた更にムカつく。

「…それって、10年前の高校生からのカウントじゃ…？」  
そんな高校生の恋愛から掘り出してきて、大人になった今の恋愛と比べて欲しくないんだが。

さっきまで悲しんでいたり、今はイライラしている忙しい自分には気もかけず俺は眉をひそめる。

そいつはふと俺から目線を外し、水平線の方へ目をやった。

「いいや。  
10年前からでも恋愛は全て繋がっているんだ。」

まるでなにかを思い出しているかのような。

そう自分も同じだったかと言いたげなような。  
その整った顔にほんの少し曇がかかったような気がした。

「君の恋愛の物語は全て、一つだって無関係なものはないよ。」

横からの表情は上手く読み取れない。  
何となく…顔は優しそうに笑っているのに目元は涙ぐんでいるかのような。

「まるで不幸なのは自分だけだと思って、自分が辛くて辛くて、楽になるために自分を甘やかすのは別に悪いとは思わない。  
だけど…君の物語の砂時計がいつまでも止まったままだと僕は悲しいよ。」

もうその顔に笑顔はなくて、真剣な眼差しをこちらに向けながら、でも俺じゃなくどこか遠くの方を見ていた。

「カナカナカナカナ…」

残暑の厳しさが続いている中、ヒグラシの声が公園中に響いた。

その言葉が俺の心の奥底の何かに響いた。

「くそ…。うるせえよ…。」

\*

- 第一章 -

【 自覚 】

まるで嘘がバレた時の小学生のように、自分が悪いのに逆ギレしてツンとしたグレたような態度で言った。

「じゃあ何を考えればいいんだよ？」

階段に手を付いて、身を乗り出しながら強めの口調。

その時にはすでに苛立ちよりも、自分の全てをはっきりと言い抜かれてもう居場所がない感情でいっぱいになっていた。

「そうだね。

…まずは、自分が悪いとはっきりと”自覚”するところからじゃないかな？」

「はあ？ 自覚？」

今、更何を言い出すかと思えば…。

俺はその発された言葉に呆れつつ、ため息混じりの当たり前だろと言わんばかりの太々しい態度で言った。

そんなことならもうずっと自覚してる。

「いや…もう嫌と言うほどしてるんだけど…。」

そうだ。自分が悪いと思ってるからこんなに…

自覚してなきゃこんなに辛くなったり、苦しくなったりしないだろ…

「いいや。

君はしていない。している人の思考では辛さの感情が違うよ。」

俺の全てを一刀両断に、ズバッと否定したその言葉には冷静さを纏っていた。

更に続けて口を開いた。

「本当に心から自分が悪いと思っている人は前を向く。

そして前に進むための辛さを味わうんだ。」

その言葉に俺は、自分の中から力一つと冷静とは真逆の感情が浮かび上がってきた。

「っ！？

俺が前を向いていないって言うのかよ！？」

なんだこいつ。お前に俺の何がわかるんだよ。

泣いている友人に対して、前を向こうと思って今辛い思いしているのに…

前を向いていないってこんな言い方で！！

はっきり突きつけるのってあまりにも酷じゃないかっ！

まるで図星で言い当てられたことに腹を立てる子供のように、冷静さの欠片もなく頭に血を登らせる。

だがそんな俺の怒りも気にせず、相変わらずの冷静な口調で真っ直ぐな表情を向けてきた。

「ああ。君は前を向いていないし、自分が悪いとも思っていない。

自分の行いは全て正しいと思って相手のせいにして、成長をしようともしていない。」

俺を真っ直ぐに見てくる真剣な表情。

いやいやいや、俺も自分の行いを全て正しいなんて思ってないし、相手のせいにしているつもりも更々ない。

ましては成長なんて…いや、考えたこともなかつたけど、先に進みたいっては思ってるし…。

「あ、この表現だと少し間違えているな。」

思い出したかのように話し始めて、うーんと言いながら、目を上に向けて人差し指を顎に当てる。

「悪いと感じているけど、それは”気がするレベル”で感じているだけ。

君は本気で自分が悪いと思おうとしていないと言うことだよ。」

「なっ！？」

悪気がなく、悪口を言っているとも思っていないような真面目な表情。

思わず、毒を吐く人もここまで追撃しないんじゃないかなってツッコミを入れたくなるような内容だった。

いや、だから俺は本気で悪いって思ってるんだって。

と、思いつつ、俺は自分のその考えにちょっとした引っ掛かりはあった。

自分が悪いとは思っている。

でも悪い気がするってだけで、はっきりと何が悪いかがわからなかった。

…うん。

……確かに…気がするレベル…では…

間違っては…

い、ない…。

自分の考えていることを言い抜かれて、落ち着きがなくなっているのか…？

額からは汗が出ている。

「いやっ、そんなことつ……。」

喉の奥底から力を振り絞り、言い返す言葉を見つけていた。

「……。」

だがやはり、もう何も言葉が見つからなかった。

俺の心はもう撃ち抜かれすぎて、ただでさえボロボロになっていたのに、更に追撃をされた。

まるで使い古されすぎて、穴の空いたボロ雑巾のようになっていた…。

もはやプライドも何も無くなつた。

正直、悔しいが…こいつの言っていることは全て…当たつている…。

俺は白状したかのように観念した。

「…わかったよ。」

人間は面白いものだ。

論破されすぎると、もうどうにでもなれと投げやりになりつつ自分に正直にもなれるのだ。

「…正直になるよ。」

俺は全身の強張りを脱落させてはあとため息をついた。

「でも…本当にわからないんだ……。

教えてくれ。悪いと感じているのに俺が思おうとしていないってどういうことなんだ？」

さっきまで真剣な眼差しで俺を見ていた顔が、ほんの少しだけ微笑んだように表情が柔らかくなった気がする。

「それはね。

君が失恋の原因を知らないからだよ。」

失恋の原因？

あ…

いや……

……まあ、確かに。

今回振られた原因はこれって言えるものがあるわけじゃない。

一応(元)彼女と話をした時にそれっぽいことを理由として言われたが、本当にその理由なのか疑わしくなる内容だったと思う。

というか、振られる内容だとわかった瞬間、全てがどうでも良くなつて正直、あまり話を聞いてなかつた。

うーん…

こちらに考える時間てくれるのか言葉の間隔が長い。  
そして俺の考えていることを悟ったかのように右の手のひらを返して、身振りを加えて説明を始める。

「母親に怒られてごめんなさいと言っているのに、また次も同じ過ちを犯してしまう子供と全く一緒さ。」

ははっと笑って、話したその言葉には棘はない。

…！  
まさか…それって俺が子供ってことじゃ…？

「その時は怒られている恐怖で謝罪する。  
ただ罪の意識はあるけど、その根本の原因を理解していない。」

俺たちが今いる公園の角には子供が遊ぶ遊具と砂場がある。  
その砂場で二人の子供が真剣な表情をしながら、一生懸命に何かをこねくり回していた。  
その子供の母親と父親と見られる夫婦が、子供を見ながら談笑して楽しそうに笑っている。  
俺は子供の方に目線を向けながら続けた。

「…つまり、本当に悪いことが何かわかつてないってことか？」

「ああ。  
まあ子供は自分が悪いと思う意識が低いからね。子供だしそれで許される。  
だけど大人は違う。  
ましてや恋愛。本当に失恋が辛くて怖くて痛いのなら、本気で自分が悪いところを全力で改善して、もう2度と同じことをしないようにするはずだよ。」

確かに…。  
毎回そうだけど、今回は特に辛い。  
もう2度とこんな失恋はしたくない。

でも自分が悪いところの改善って…？

「この考え方の肝心なところは”他人は変えられない”と言う考え方を理解することだよ。」

「？ どういうことだ？」

「君も一度くらいはあるだろう？相手を良くてあげようと思ったこと。」

「確かに… あつた…と思う。」

そういえば以前、付き合っていた彼女に化粧をもう少し柔らかくして女の子ぽくした方が可愛くなるんじゃないかなと思って指摘したことがあった。

でもその指摘が原因で大喧嘩して振られたんだっけなあ。

今にして思えば、俺は彼女のためにもっと良くてあげたかったと思ってたけど、相手からしたら…。

「でも大きなお世話ってとんでもない形相で言われて振られた…。」

「そう、それは相手に自分の考え方を押し付けると同じこと。

君が逆の立場ならどうかい？君の価値観の全てを変えることができる？」

「…。

いや、むり……かな。」

「うん。それが例え、愛する人でもとても難しいことだと僕も思う。」

なるほど。

考え方の押し付けか…。

今まで相手の立場で考えたことがなかったからわからなかつたけど…。

もしも逆の立場で俺が望んでいないのにファッションとか髪型とかまで口出しされたら、確かに俺も嫌だと思うかも…。

「だから君自身。つまり”自分”が変わっていくしかないんだ。

今回の辛さの原因が君自身だけのものじゃなかつたとしてもね。」

…自分が変わる…か。

でも、ん？

あれ…？

「…？

自分が変わるしかないことはわかつた。

でも俺自身の原因じゃないのに俺が変わらなきやいけないってどういうことだ？

それって相手が原因ってことだよな？」

「そう。相手が原因だったとしても君が変わらなきゃいけない。  
全てが君自身の責任になるってことさ。」

「？」

いやわからなすぎるわ。  
なんで相手が原因で俺の責任になるんだ！？  
どう考えても悪いのは相手じゃんか。

「例えば、相手の浮気が原因で破局しちゃった場合はどう思う？」

「いやいや、それは俺が悪くないんだから、何も変われないぜ？」

「いいや違うよ。この場合も君が悪い。」

「はあ？ なんでだよ？」

意味が全くわからない。  
これで理不尽な理論だったら、もう話をこれきりにして帰ろう。  
俺がそう思って話半分に聞いていた時、これまでやりとりしてきた中で最も真剣なトーンで思わぬ言葉が返ってきた。

「それは君が相手を放置しすぎて、相手が我慢できなくなったからかもしれない。  
いや、君が毎日ダラダラと過ごしていたために、男性的な魅力がなくなったからかもしれないね。  
いや究極的にはこうも考えられる。  
君が選ぶ相手を間違えたのが悪かったと。」

「！？」

「具体的な原因がないから絞り込めないけど、相手が浮気した場合でも君を悪くする考え方はいくらでも考えられる。  
要するに君の”考え方”ってことだね。」

うう...。  
確かに...。  
ちょっと身に覚えがあることも言われた気がしたが、考え方一つで俺が悪くなることがあるな。  
いや、というか今まででも浮気された時、完全に相手が悪いと思って相手を責めてしまっていたけど、元を正せば俺が悪かったってことがあるかもな...。

表面上の別れる原因是相手の浮気だけど、その浮気の原因を作ったのは俺。と言うことは間接的には俺が悪いと言うことも納得がでてしまう…。

そしてその事実の真偽はわからないけど…。

そう考えると、なんか…

その責めてしまった彼女に申し訳ない気がしてきた…。

「…なるほど。

一つの出来事に対して、それを考える人の数だけ答えが存在する…。ってことか…？」

「！ そうだね。その通りだよ。」

ちょっとハッとした顔は、すぐにより一層の笑顔で今は嬉しそうな感じがする。

「じゃあ今回のことに戻ってみようか。

今回の君の失恋、誰が悪かったか。本当に君は君自身が悪いと自覚していたかい？」

また最初の質問。

今の説明を聞いてからの…もう、答えがわかっていることをもう一度。

俺の口からそんなに聞きたいか？

はあ。性格が良いんだか悪いんだか。

俺は再度のため息を吐いた。

でもさっきまでの間違えてた考え方には罪悪感を感じてもいた…

そしてちょっと照れ臭そうにして横目で言った。

「…いや、して、なかつた…な。」

その整った顔立ちで、はっきりと俺の目だけを真っ直ぐと見つめてニコッと笑った。

「ああ。その自覚が君が変わる第一歩だよ。」